

# 図書館史研究会 ニュースレター

第11号 昭和59年5月2日

昭和59年4月30日(月)午後5時から、東京水道橋の「談話室 滝沢」にて第7回運営委員会を開催した。出席は小川徹、中林隆明、阪田蓉子、河井弘志、工藤一郎、寺田光孝、石井敦、川崎良孝。委員会では、夏季セミナー、機関誌『図書館史研究』、ニュース・レターの内容などについて討議した。以下、項目別に報告する。

## (I) 第2回図書館史セミナーについて

セミナー検討委員会(小川、中林、常盤、阪田、河井、工藤)からだされていた案にもとずき検討した結果、次のように決定した。

名 称：図書館史を考えるセミナー(第2回)

日 時：59年9月2日(日)、9月3日(月)

場 所：東京 赤坂 アジア会館

テーマ：図書館史研究の現状と課題

— 「開かれた図書館」づくりの歴史的系譜をたどる —  
詳細については、7月上旬に発行予定の次回のニュース・レターで扱う。なお、セミナー実行委員会の構成は、以下である。

セミナー実行委員長 小川 徹(法政大学)

実行委員 中林隆明(国立国会図書館)

塩田一徳(法政大学図書館)

田沼明子(大原社会問題研究所)

## (II) 機関誌『図書館史研究』について

9月のセミナーに合わせて刊行する。順調にすすんでいる。

## (III) ニュース・レターの内容について

従来のニュース・レターは、ほとんどが運営委員会の報告に終始していたが、今回からはニュース・レターの充実のため、図書館史にかんする短い原稿を掲載することに決定した。あつかう対象は次のとおりである。ふるって御投稿ください。

- (1) 単行書の書評
- (2) 史料紹介
- (3) 海外文献の紹介や論評
- (3) 論文の紹介と論評 など

投稿規定 1. 枚数 横書き原稿用紙12枚以内  
2. 送付先 椋山女学園大学(事務局)  
3. 原則として、送付された原稿は、次回のニュース・レター  
に掲載する。

(以上 文責 川崎良孝)

---

\* 事務局からのお知らせ

(A) 昭和59年度 新入会員

会員数 118名 59年4月30日現在

(B) お願い

59年度の会費払込状況は、4月30日現在78パーセントとなっ  
ています。59年度の会費を未納の会員にたいしては、再度  
振替用紙を同封しておりますので、なにとぞよろしくお願  
いいたします。

(書評)

是枝英子著 「知恵の樹を育てる ―信州上郷図書館物語―」

大月書店 1983年10月

評者 山口源治郎 (名古屋大学大学院)

(1)

社会教育史研究や歴史学においては、断片的な記述ではあったが、戦前長野県の青年運動における青年団の文庫(図書館)活動や読書会活動の存在とその積極性が指摘されていた。そうした点で、戦前長野県下の青年団図書館の活動については、いずれ誰かが研究に着手するだろうと予想されていた。是枝氏の論文「大正デモクラシー期の図書館運動―上郷図書館を事例として―」(『歴史評論』NO.378, 1981年10月)の発表と本書の刊行は、この意味で出るべくして出たものであり、同じわが国図書館史を研究する者として、敬意とともに羨望の念をかきたてられるものであった。

ところで、従来の図書館史研究では、

青年団と図書館は、維持費は青年団などの勤労奉仕や有志寄付によっていたが、永続きするものではなく、次第に村費や教育会の補助金をうけるようになり、建物は小学校の一部がほとんどで、そのほか部落の共同施設を利用、蔵書は500～1000冊というのが普通であった。そうして図書の内容は上記のように修養書が圧倒的に多く、つづいて文学書という傾向になっていた。

だからここでは、もう図書館の像はすっかり歪められてしまったことは明らかである。(前川・石井 『図書館の発見』 p. 171-172)

という指摘に代表されるように、戦前青年団の手になる文庫(図書館)の設立や活動は、国家権力による上からの強力な指導の下に、「修養」や「思想善導」のために設けられ活動したものであり、小規模かつ素人経営によるものであって、「歪められた図書館像」を代表するものと考えられてきた。それ故、戦前青年団図書館については、その量的な側面や教化的な性格について批判されることはあっても、そこに何らかの積極性を見出し、それに歴史的社会的な分析・評価を加えるという作業は等閑に付されてきた。

こうした中で、是枝氏の研究は第1に、下伊那という戦前社会運動のきわめてさかんな地域においてではあったが(またそれ故に)、そこにおける青年団図書館の可能性に注目したことが挙げられる。注目すべき点は、下伊那の中でも最先端を進んだ青年団ではなく、それより一歩退いた位置にある青年団に着目していることであろう。

第2に、図書館の設立や活動のプロセスを、青年の生活や思想形成、地域的な背景（土壌）の中から描こうとしている点は、単なる一館史や教化政策の中央から地方への浸透過程として描く、地方図書館史の域を出て、本格的な地域図書館史の試みとして重要である。第3に、分析の枠組みとして、「近代公共図書館運動と民主主義運動」の関連構造を問うという問題設定を行なっていることなど、従来の図書館史研究とは異なる魅力をもつものである。それはまた、わが国図書館史研究の水準を高めるものとして画期的であるように思われる。

筆者は以上のような是枝氏の研究の意義を確認しつつ、しかし本書に対する、また必要に応じて上記論文に対するいくつかの問題点を以下に指摘しておきたいと思う。

## (2)

本書は是枝氏の精力的な現地調査と実証研究を基礎にしているとはいえ、叙述の方法としてあえて「物語」の方法を取っている。そこには出版経営上の必要性以上に、わが国図書館史の民衆的伝統を多くの人々に伝えたいということや、上郷図書館とそれを支えた青年像のリアリティーに肉迫する方法としてこの方法はより有効である、という積極的理由があったものと推察される。しかし、リアリティーに迫るという点では、本書における推測と事実の不分明さ、概念の不明確さ、そしてやや図式的一般的結論づけ等によって、逆にリアリティーを薄める結果を招いているように思われ不満がのこる。たとえば、本書の基本的な分析の枠組みに関して、是枝氏は次のように指摘している。

こうした青年たちの文庫活動は まさにあのアメリカのフィラデルフィア図書館会社の双生児だというべきものである。（本書 p. 63）

そこでは、上郷文庫の運動が「日本の近代公共図書館運動の原点」であるとも指摘しているように、是枝氏にとって上郷文庫とフィラデルフィア図書館会社は、歴史的アナロジー以上に「双生児」=等価的性格をもつものと考えられている。しかし、言うまでもなく明らかなことは、一方は特殊日本の社会構造を基礎に独占段階に入った社会の農村青年を主体とし、思想的には社会主義への傾向を示した青年運動の中から生まれたものであり、他方は市民革命期の中産階級を主体とした運動の中から生まれたものであったことである。とすれば、上郷文庫の歴史的社会的性格規定の問題として、しいては歴史的リアリティーの問題として、両者を「双生児」とすることは問題があるといわねばならない。その意味で、運動の現象的類似性をもって本質規定にすりかえることは、非歴史的見解であるといえよう。

また、上郷文庫運動が「日本の近代公共図書館運動の原点」（下線は引用者）であ

るとする点についてみるならば、本書でほとんど概念整理もされず各所に登場してくる、「地方改良型」「思想善導型」「国策型」といった図書館類型が、上郷文庫にみられる図書館と、いかなる関連構造をもっているのかも問題となろう。というのも、上郷文庫が文字どおり「地方改良型」図書館を歴史的現実的基礎として生み出されてきたものであり、自主化がつきくずされるとともに「国策型」へ回帰していく経過があるからである。「地方改良型」図書館にせよ上郷文庫にせよ、それらは等しく「近代」日本の現実の中から生まれたものであり、「近代」日本の現実には何らかの存在理由をもつものであったと考えられるからである。とりわけ、下伊那地域には国学の思想と社会主義という両極ともいえる思想傾向が同居していたり、社会主義や自由主義が地域をつつむとともに、満蒙開拓団を最も多く排出した地域でもあったという、きわめて錯綜した諸状況のみられた地域であったことを踏まえるとき、「地方改良型」対「民衆主導型」といったやや単純な図式化は、かえって下伊那に生まれた青年団図書館のかかえる問題構造を、あいまいにしてしまうのではないかと思われる。

また、「近代公共図書館運動と民主主義運動」の関連構造を問う氏は、「公共図書館および公共図書館運動」を上記論文で定義し、「公共図書館とは、一言でいうならば、国民の学習権を保障する社会的機関」であり、「図書館運動はそのような図書館を住民自身の共同意志によって住民が確保する諸運動をさす」とのべる。しかし、わが国の図書館運動を歴史的にみるとき、『図書館の発見』の引用文にも見られるように、国民あるいは青年の「学習権」を「修養」にすりかえ、「学習権」を阻害する青年自身による図書館運動も存在しえ、図書館員を主体とする図書館運動も存在したということからするならば、わが国における歴史的な概念としての「公共図書館運動」という概念は、上記の定義で足りるか否か再吟味される必要があるだろう。少なくともわが国「近代」における公共図書館運動は、民主主義運動に内在的契機をもつものとして、また民主主義運動に対抗することを契機としたものであったという矛盾構造をふくんで規定されていく必要があるだろう。

さらにこの点についてみるならば、「近代公共図書館運動」と「民主主義運動」とが、わが国においていかなる内在的契機によって結びついていったのかについて、本書の指摘はきわめて一般的・抽象的であって、そのリアリティーに十分迫っているとは言い難い。いわく、「豊かな生活を求め」、いわく「自由と人間解放を求め」・……。問題は、上郷文庫（図書館）を支えた青年たちが、具体的にいかなる「生活」課題に直面し、その中からどのような「自由」と「解放」を求めたのか、そしてそれらと図書館がなぜ結合したのか、より先進的であった千代村や鼎村では何故に上郷村のように結合しえなかったのか（その意味で「近代公共図書館運動」と「民主

主義運動」とは、即自的・無媒介的な関係ではない) という点の今一步ふみこんだ分析が必要であったように思う。

その他、解釈上の問題点についてみれば、まず1915年の上郷青年会第五支会の御大典記念文庫「設立趣意書」について、是枝氏はそこに「生存権」の主張をみている。しかし、そこに主張されていることは、資本主義的「生存競争」の是認と、その「生存競争」に生き残ることを主張したものであり、資本主義的「生存競争」の批判と修正とを本来目的とした社会権としての生存権とは、むしろ異質のものと考えられるがどうであろうか。

また是枝氏は、「図書館への権力支配を拒み、自由で自主的な学習活動こそ図書館の命とする思想は、つねに上郷図書館運動の中に流れていた」という。しかし、本書においても描かれているように、上郷青年会は、いち早く自主化を自ら取り下げることや、図書館の自主性についてもその財政や図書選択権の在りかたをみると、現実にも自主性を守るしくみについてやや無頓着で妥協的であったことなど、必ずしも「つねに」とはいえないのではないかと思われる。

むしろ美談調に描くのではなく、こうした弱点をもふくんで上郷図書館運動を歴史的にきびしく見つめることこそが、より今日的教訓を引き出す上で必要なのではないだろうか。昨今は住民の自発性・自主・参加をうたいながらも、現実には行政の下請をやらされるといった事態が広まりつつあると思われるからである。言い換えれば、「自主的」ということが、その理念としくみと内容と担い手の問題をふくんで、より厳密に検討されなければならないと考えられるからである。

なお、今後の研究課題の問題として、こういうすぐれた青年団図書館のみではなく、いわば、「修養機関化された青年団」の図書館についても、単なる教化主義批判のためばかりではなく、わが国の図書館の歴史的特質に迫る立場から、深い分析を加えていく必要があるように思われる。